

---

# 青いペンキ

MCおもむろ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

青いペンキ

### 【Nコード】

N5885A

### 【作者名】

MCおもむろ

### 【あらすじ】

大切な“モノ”を作りたいくない青年。彼は一人の少女と出会った。少女は、肩で切りそろえられた髪を揺らし、そして、笑った。

## 1 思考

“もし、今、オレが死んだら、悲しんでくれる人はいるのだろうか？”

ふと、考えることがある。

家族？友達？恋人？

どれを挙げても、いなかった。

誰も悲しんでなんてくれないだろう。オレが死んでも、その前の生活となんら変わりはないのだろう。オレが死んだことなんて、いや、“オレ”がいたことさえ知らずに。

そんなことを考えてしまうという事は、観的にみてもろくな生き方をしていないんじゃないか？  
いや、していないのだ。

そんな生き方で中学を過ごしたオレは、友達と呼べる奴は作れなかった。それもそうだ。自分から作ろうとしなかったんだから。  
クラスメイトとは一線を引き、適当な関係で続けた。授業も遅れない程度にやって、はっきり物申す担任に言われた言葉が“事なかれ主義”。

うまいな。と思った。まさにオレにふさわしい。

それでいいと思う。感情的になりたくない。もし、それで大切なモノなんか作ってみる。

…また失うんだ。壊れて、二度と元に戻らない。

だから事なかれ主義でいいんだと思う。

……いや、思ってたんだ。

## 2 出会い

春のくせに…。

熱い日差しを浴びながら、空をにらむ。しかし、そんな事をして、  
照りつける太陽は、涼しくなんてなってくれなかった。

外壁に視線を落とし、自分が落ちないように、足場にしっかりとつかまりながら、塗料をぬりこんでいく。外壁は、生まれ変わったかのように真っ白になってゆく。

これがオレの仕事。もちろん、太陽をにらむ事じゃない。いわゆる、塗装屋と呼ばれるものだ。

作業中は、塗料をムラなくぬりこんでいくだけでいいのだが、最近  
は、太陽をにらむのも職務になっている。金にならないが。

「おい！」

ふと、背後から女の声が聞こえる。

「その塗装屋さん！」

オレの事か？

しかし、そう思っても振り向かないのは、オレが事なかれ主義といわれるゆえんだな。

「その黒い作業服着てて黒い髪の毛で作業中なのにヘルメットかぶってないおにいさん！」

完全にオレの事だな。

ここまで言われて、ようやく振り返る。声の主は、隣の家の庭にいる奴だろう。たぶん、オレと同年代くらいか。

「……はい、なんですか？」

“ 近所の家の人には、やさしくしとけ。 ”

仕事の先輩、シンさんがそう言っていたのを思い出した。こういう仕事は、近所の人の仕事っぷりを見て、自分の家もやってくれ、というのが少なくない。オレはもてるかぎりの営業スマイルを送ったつもりだ。

しかし、オレの顔は笑ってなかっただろう。相手には怒ってると思われただろうな。

「まあまあ、そんな恐い顔しないで〜！」

ほらな？

女は、自分の横にある、犬小屋らしき物を指差す。それは相当古いのか、木製のそれはかなり黒く変色していた。

「これ、ちよこつと塗ってくれませんか？」

この人のちよこつとは、どういう基準なのだろう？ 塗料を一滴たらせば十分か？

……いやいや、やさしくやさしく。

その犬小屋は、そこまで大きくなく、10分もあればできそうだった時計を見る。時刻は12時10分前だった。

…早めの昼休みって事にするか…。

「…いいですよ。何色がいいですか？」

彼女は肩で切りそろえられた髪を大きく振りながら、飛び跳ねるくらいに喜んでいた。

「じゃあ、虹色！」

「…無理です。」

。

犬小屋のやねに、ローラーを転がす。犬小屋は今の空と同じような色合いになった。

まあ、結局、色は水色に決まった。名字が水野だからだそうだ。

「うわぁ！綺麗になりますね！」

当たり前だ。これで汚くなったら仕事にならないだろ。と、心の中で皮肉はいうが、そんな事を口に出せるわけがなく、あいまいに、はあ、そうですね。とだけ言った。

「そうですねって、あなたが塗ってるんでしょう？」

彼女はクスクスと笑っていた。

その笑い声を背中で聞きながら、作業の仕上げをする。

「フウ、できた。」

犬小屋を塗りおわり、へんな所につかないようにするための養生ようじょうと呼ばれるテープを剥がす。

「1時間くらいで乾くと思うんで、それまでは気を付けてください。」

そう言いながら振り向くと、彼女は手を合わせて驚いていた。

「すごい！こんなに変わっちゃうもんなんですね！」

オレはここまで喜ばれると思ってなかったので、すこし照れながら、はあ、まあ。と、またあいまいな返事をした。

「そうだ、ポチにも見せなきゃ！ポチ〜！」

…ポチ？まさか犬の名前か？なんてありきたりな…。ありきたり過ぎて逆に珍しいぞ…。

彼女は口の前に、手で輪っかを作り、その名前を読んだ。

すると家の奥から、ドタドタと足音が聞こえてきたと思うと、小さな柴犬が現われ、彼女に飛び付いた。

彼女は小さな悲鳴をあげながら、しっかりその犬をキャッチした。



「この子がポチです。なんにでも飛び付く癖があるんですよ。」

ポチは彼女の顔をひとしきり舐め回したあと、自分の小屋の異変に気付いたようだ。尻尾をふり、かなり興奮しながら犬小屋を見つめている。

ポチは一回元気に鳴くと、一直線に犬小屋に向かう。

「あつ！ポチだめ！」

彼女の制止を気にも止めず、ポチは自分の癖を存分に発揮した。

乾ききつてない犬小屋に。

「あーあ……」

彼女は、愛犬がみるみるうちに青ざめていく様を、止める気力もないような声を出して見つめていた。

### 3 友達

「もうじゃんじゃん食べてね!」

彼女、水野さんはそう言いながらメニューを差し出す。

そう言われると、何にすればいいのか迷うな…。

「なんかオススメみたいなのない?」

「オススメって…ここファミレスですよ?」

「ですよネ…」

昼。オレ達は、ファミレスに向かい合いながら座っていた。

水野さんは犬小屋のお礼をしたと言った。オレは断ったのだが、  
「お礼といつてもお金とかじゃ味気ないよね……そうだ、お昼御飯  
おごりますよ! あ、でもお金あんまりないから、ファミレスでいい  
ですか? よし! そうと決まったら混む前に早く行きましようっ!」  
と、まくしたてられ、いつのまにかオレは水野さんとファミレスに  
いる。

「ダメだ。水野さんが適当に決めてくれ。」

散々迷った挙げ句、オレは自分で決められなかった。自分の意見が  
無いと、こういうときに困る。

オレはメニューを水野さんに返す。すると、もう、呼び出しボタンを押して、ウェイトレスにメニューを言い渡している。

「スペシャル理恵ちゃんメニューにしました！」

オレに元気に笑いかける。小さなえくぼが出るその笑顔は、彼女の性格そのものが出ている気がした。

……彼女は、オレと正反対だな。自分をちゃんと持っていて、いつでも笑顔を絶やさない。

……でも、オレはオレのやりかたで正しいと思う。人に笑いかけて、得るものはない。あのポチみたいに、誰にでも尻尾を振っても、得るものは何もないんだ……。

「どうしたんですか？ そんなに私を見つめたら、私に穴が開いちゃいますよ。」

その声で、オレは考える事をやめた。

「あ、いや……なんでもない……」

その時、ふと、ウェイトレスが目に入る。

ウェイトレスは、手いっぱい食べ物を重たそうに持ちながら、こちらに歩いてくる。

……まさか……。

「お待たせしましたー！」

ウェイトレスは、眉をひそめているが、なんとか営業スマイルを保

ち、食べ物をどんどんテーブルに置いていく。  
テーブルはこの店のメニューを全部頼んだんじゃないかってくらいに、所狭しと食べ物が置かれている。

「…これは…なんだ…？」

「ん？スペシャル理恵ちゃんメニューですよ？すごいでしょ？」

「すごすぎるだろ…」。

「あ、食べ残すっていうのは一番やっちゃいけないことなんですよ？」

彼女は、さつきとまったく同じ笑顔を見せる。

「…いただきます…」

。

1時。昼休み終了の時間だ。しかし、オレはまだファミレスにいた。

「な、なんとか食べたな……」

「おいしかったですね！」

いや、最後は味なんてわからなかったよ…。

彼女はまだ腹八分目といったような、余裕の表情をしている。

対するオレは、身動き一つとれずに、ひたすら胃の中の食べ物が消化されるのを待っている。

「そういえば、えーと、紺野さん？」

彼女はオレの着ているベストの胸を見ながら言った。オレはうなづく。

「紺野さんは何歳なんですか？見た目は、私と同じように見えるけど。」

「水野さんは何歳？」

「16です。高校2年生。」

「じゃあ、おなじ。オレも16ですよ。」

「へえー！偉いですね！同年代なのに仕事してるなんて。」

「いや、バカだから高校に行ってないだけだよ。」

オレは嘘をついた。

たしかに授業は適当に受けていたが、成績は悪くなかった。いや、上から数えたほうが早いほどだ。

でも、オレは高校には行かなかった。早く独り立ちしたかったのだ。

誰にも迷惑をかけたくなかった。誰にもオレの生活に干渉して欲しくなかったのだ。

「たとえ紺野さんがバカでも、仕事をするのはすごいと思いますよ？ 今ぐらいの歳は遊びたい盛りじゃないですか。」

……高校行っていないのはバカにしないんだな。

オレはそのことが少しうれしかった。

「そう…かな…。はは、ありがとう。」

と、オレは自分でも驚く程に正直に答えてしまった。

彼女はおもむろに携帯を取り出すと、オレにも携帯を出すように促す。

「番号、こうかんしましょう？」

いつもなら断るのだが、今日の気分は、よくわからないが、なんだかいつもと違った。

オレは言われるままに番号を交換してしまった。

「これで、あなたと私は友達ですね！」

その言葉に、オレの心臓は不整脈を打つ。

…ともだちか…。

オレは心の中で、自嘲気味にわらった。

「…ああ、そうだな。」

心にもないことを言った。友達の存在を肯定するなんて、心にもない。

「じゃあ、敬語もおかしいですね。よろしく！紺野君！」

オレの心も知らずに、彼女は元気に微笑みかける。

「ああ。よろしく、水野さん。」

……この時は、こいつがオレの生活に大きく影響するなんて、思ってもみなかった。

オレと水野さんは一緒に現場に戻った。  
するとそこには、見慣れた作業服を着た人がたっていた。

その人がゆっくり近づいてくる。

「冬貴くん……？現場の様子を見にきたら、昼休み過ぎても現場に戻ってこないと……なんですか？これは……？」

「あ、シンさん……お疲れさまです……」

シンさんは口の端と、眉の端がつり上がる。

「昼休みに女の子といちゃいちゃですか？いちゃいちゃですか？いちゃいちゃですか！いんざすかい……！」

あ。壊れたね。

オレはこの後、何故かいじけてしまったシンさんをなだめるのに労

を費やした。

…この現場は、当分終わりそうにない。



#### 4 青年

プルルルップルルルッ

耳障りな携帯の電子音に、無理矢理まぶたをこじ開ける。

今日は日曜日。一週間の疲れを取ろうと、今日はゆっくり寝るつもりだった。

「だれだよ……」

悪態をつきながら、目をこすり、ふたつ折り携帯をゆっくりと開く。ディスプレイは、水野理恵からの着信を知らせている。思わず舌打ちをしてしまう。オレの眠りを妨げる奴は、何人たりとも許されない。

通話ボタンを押し、携帯をゆっくり耳に押しあてる。

「……はい……」

誰の声かと思うほど、かすれた声がオレの喉から絞りだされた。

『冬貴っ？まだ寝てたの？いい加減おきろ！』

メールをやりとりしている内に、いつのまにかオレを呼び捨てにしている。

「……なに……」

なかなか用件を切り出さない事に、オレの寝起きの悪さも足されて、かなり不機嫌になっていた。

『ひま！あそぼ？』

電話の向こうはかなり騒がしい。

「……………やだ。」

『な、なんで！？』

断られると思ってなかったのか、声はかなり動揺している。

「オレは寝るの……………おやすみ。」

『なんでよ！あそんでくださいよ！』

電話を切って寝るつもりだったが、水野の声を聞いてる内に眠気が引いてきた。

ため息を一つはいて、ベットから起き上がる。

「……………しょうがないな……………」

『やった！じゃあ、今から30分後に駅の改札ね！』

「え、あつ、ちょ……………」

プツツと大きな音が聞こえたかと思うと、通話が切れた事を知らせる断続的な音が聞こえ、水野から返事が返ってくることは無かった。

ため息をつく気力もない。オレはとりあえず、まだはつきりしない頭を覚醒させようと、おぼつかない足で風呂場にむかった。

蛇口をひねると、熱いシャワーが頭から振りそそぐ。

……ここは母さんが買ったマンションだ。オレはここで一人暮らしをしている。

別に家が裕福でも、オレのために買ってくれたわけでもない。このマンションは、母さんが唯一遺した財産なのだ。遺したということだから、母さんはもう、この世にはいない。

オレは母子家庭に生まれた。父親は、オレが生まれる前からいなかった。

一人息子のオレを、母さんは一生懸命育ててくれた。

「お父さんがいなくてつらいだろうけど、がんばろうね。」

母さんはいつもオレに言っていた。

だからオレもオレなりに一生懸命になった。

オレは母子家庭に生まれて、後悔なんて感じていなかった。父親がいなくても、こんなに立派な母親がいる。オレは母さんさえいれば父親なんていらない。

そんなことさえ思っていたのだ。

そしてが中学2年生の時。

死んだ。

事故だった。

オレはその後、一旦は祖父に預けられたが、高校に行かずに塗装屋を始め、祖父が売らずに残してくれていたこのマンションに引っ越し、今にいたる。

事故だった。しかたないのだ。

オレは母さんを思い出すたび、いつも自分に、そっぴい聞かせる。

…でも…。

しかたなかったのか？

オレは何もできなかったのか？

…オレは…あの時、母さんを助けられたんじゃないのか……？

なにもできなかったんじゃないくて、なにもしなかったんだ。

心の中の、あの時のオレが、オレに叫んでいた。

。

「…おそい！」

水野が腰に手をあて、オレを下から睨み付ける。

オレはシャワーをあびながら、ボーツとしていたら、いつのまにか

30分をとくに過ぎていた。

いそいで着替え、駅に向かったのだが、マンションから駅まで走っても10分はかかる。

それでもなんとか7分でついたのだが……。

「おそすぎる！」

だそうだ。

「もう！女の子をこんなところで待たすなんて」

自分が駅の改札っていつんだろ……。

「なんか文句あんの。」

「……ないです……。」

水野はオレの物言いたげな視線を敏感に感じ取ったみたいだ。

「悪い。なんかおごるから。」

「うん！」

……あれ？さっきの不機嫌な態度は……？

オレは呆れて、ため息しかでない。

「なにため息なんてついてんの！ほらっ、いこっ！」

水野はオレの腕を無理矢理引っ張って、先導する。

「あつ！おい……」

オレは水野に促されるまま、駅を後にした。

。

「映画か…いい趣味してるな。」

「でしょー！？」

オレは、水野に促されるままに歩いていくと、映画館に辿り着いた。その映画館は難解な町並みに隠され、静かな所にひっそりと立っていた。中に入ってみると、外の寂れた雰囲気とは違い、掃除の行き届いた小綺麗な内装だ。

昔からここにすんでいるが、こんな所があるなんてわからなかった。映画鑑賞が趣味で、よく映画館に行くのだが、いつも電車を乗り継いで隣町まで行っていたので、この町にも映画館があると知ったことはうれしかった。

「私、見たい映画があったの。」

水野はそう言うと、上映中のパンフレットが置いてあるところに行き、その中の一枚を持ってきた。

「これこれっ。」

そういいながら、オレにパンフレットを手渡す。  
それは、いま話題の映画らしい。

「じゃあ、これ見るか。」

オレは、別に映画のジャンルは選ばない。

映画を見ると一人の世界に入れる。これが好きなのだ。  
さすがに、ギャグやアニメなどは見ないが、それ以外にも、特に好き好んで観る映画は無かった。

「キップ買ってくるよ。」

オレはキップを二枚買って、水野にあげた。昼メシをおごってもらったお礼のつもりだ。

水野はかなり遠慮していたが、オレがもうキップを買ってしまった後は素直に受け取った。

キップを従業員に渡し、上映室に入る重厚な扉を開けると、中は意外と奥行があり、中々に広がった。

席の中央を陣取ると、すでに他の映画のコマーシャルは終わり、本編が始まるうとしていた。

スクリーンが暗くなり、一瞬視界が何も見えなくなった時、映像がフェードインしてくる。

そこには一人の青年が、こちらに背中を向けて立っていた。

これが、物語の主人公なのだろう。

その青年が喋り始める。

『……オレは時々、ふと、考えることがある。』

その声は、子供でも大人でもない。中途半端な人間。“青年”の声だった。

青年は一旦そこで区切り、また喋りだす。

『今、オレが死んだら、悲しんでくれる人はいるのか？』

心臓が飛び出そうになる。まさに、オレの考えていることだ。

『家族？友達？恋人？………どれを挙げてもしなかった。』

青年がこちらに振り向く。その瞳は、死んだような、悲しい瞳をしていた。

……オレもこんな目をしているのだろうか。

……物語がすすむ程に、青年はオレとそっくりという事がわかった。境遇も、性格も、すべてが。

青年はオレと同じように、人との深い関わりを拒絶していた。

理由は幼い頃に家族を全員失ったから。

青年は大切な人ができた時に、それを再び失うことを恐れていた。物語の中盤で、青年は自分がもうすぐ死ぬと医者に宣告される。

日々、病気に侵され、それと戦う。しかし、青年はいつも一人だった。それもそうだ。自分で望んだのだから。

青年はついに死ぬ。



幽霊になり、この世に戻ってみる。案の定、自分が死んだことを悲しんでくれる人はいなかった。  
物語の最後に、青年が語る。

『ああ、オレは本当は誰かに愛され、愛したかったんだ。大切な人が欲しかったんだ。誰かに悲しんで欲しかったんだ。』

青年はそう言つて、天国の家族に会いに行つた…。

……オレもこうなるのかな。

たしかに、このままでいたらこうなるだろう。

でも、それをオレは悲しまない。大切な人なんてつらいだけだ……。

オレは……オレは、本当にそう思っているのか……？ 誰の思い出にも残らないまま死ぬことを望んでいるのか……？

オレは……オレは……。

「……うき……とうき！」

はつとして顔を上げると、水野が心配そうにオレを見つめている。

「大丈夫？」

「あ、ああ……」

オレはスクリーンをみる。

物語は、もう終わっていた。

## 5 過去

映画を観おわり、中の喫茶店で食事を済ませ、外に出てみると、西日が沈みかけていた。

水野が、このまま帰るのもなんだか味気ない、という意見を了承して、オレ達は公園に向かった。

「うわあ、何にもないねー……」

水野が、驚いているのか、呆れているのかよくわからい声をあげる。

たしかに、この公園は中央にブランコがあるだけ。

それと所々にベンチがあるだけで後は何も無い。

砂利が地面に薄く敷き詰められただけのただっぴりい、文字どおり、ただ無駄に広いこの公園をみると、呆れを通り越してむしろすがすがしくなる。

オレ達は中央のベンチに座り、西日が沈んでいくのを見つめながら、他愛もない話をしていた。

話が、オレが一人暮らしをしている話題になった。

「えっ？一人暮らししてるの？すごい！よく両親が認めたね！」

オレが、母親は死んだことをいうと、水野はしまった、という顔をしていた。

「う……ごめんなさい……いやな事聞いちゃって。」

水野はうつむき、気まずそうにしている。

「いや、大丈夫だよ。」

正直、大丈夫じゃなかった。今でも、思い出すと悲しみのどん底にたたき落とされた気分になる。

オレは、今まで母さんが死んだことを人に言ったことがなかった。水野に言ったのは、もしかしたら、水野なら同情をしないでくれるんじゃないか、と思ったからだ。

水野は、人を正直にさせる力みたいなのを持つてる。まるで心理力ウンセラーと話しているみたいに、嘘をつけないのだ。

ふと、水野を見ると、黙ったままオレを見つめていた。

「な…なに…？」

「うん。冬貴になら話してもいいかな。」

水野はそう言って微笑むと、オレから視線を外し、虚無を見つめた。

「こんなの、人に話す事じゃないとおもうんだけど…。…私も両親をなくしてるの。」

。

水野理恵の父と母、恵一<sup>けいち</sup>と真理<sup>まり</sup>は、大学で出会い、恋に落ちた。

しかしそれは、周囲に認められた関係じゃなかった。  
真理の家庭はとても厳しく、両親が見繕ってきた男以外は、断固として認めなかったのだ。

恵一の父だけは、二人の関係を応援してくれていた。  
二人はそれを励みに、ついにはかけおちする事を決意した。

かけおちした後はかなり苦勞したが、理恵が生まれ、6歳になった頃には、誰の目から見ても、幸せな家庭だった。

そして、二人は決めた。

真理の両親にも、関係を認めてもらおう。  
もう遅いかもしれないけど、孫ができたことも報告しよう。  
この家庭を、みんなに認めてもらおう。

二人は、真理の両親の家に行くことにした。

。

朝。今日は二人とも仕事を休み、朝から準備に追われていた。真理の実家は県外なので、車で行くには、朝早く行かないと渋滞してしまう。

「真理さん、このネクタイはどうか？」

恵一は、不安そうに真理にたずねる。

「これはちょっと派手じゃないかしら。」

真理はそう言うと、ネクタイのしまつてある引き出しをかき回し、目当ての1本を取り出した。

それを恵一の首元にあてがい、

「うん、これね！」

と言うと、恵一にそのネクタイを渡した。

恵一は眉をひそめながら、真理に言う。

「真理さん。化粧が濃くないか？そのままでも十分綺麗だよ。」

「やだ、恵一さんたらっ。30過ぎたオバサンにノーメイクで外に出るなんて言うのはだれですか？バカですか？」

「ごめんなさい。」

真理のトーンの低い声に、恵一は尻込みし、素直に謝った。

「パパママ〜。お出かけするの？」

理恵は両親の慌ただしい様子を見ながら、目をこすり、起き抜けの眠たい声で言う。

恵一がネクタイを結びながら言う。

「パパとママはね、これから大事な所に行くんだ。理恵もつれていきたいけど……びっくりは最後にとっておくのが一番！」

恵一はネクタイを結びおわり、腰を曲げ、理恵の頭の上に手を置く。

「夕方には帰るから、それまでお留守番できるか？」

理恵は満面の笑みで答える。

「うん！できるよ！だって、理恵はもうすぐお姉さんになるんだもん！」

「んん、いいこだな！」

恵一は緩んだ口元でそう言つと、膝をつき、理恵を抱き締めた。

真理は、もう一人の命を抱えていた。

妊娠6カ月で、人目にはわからないが、お腹が張り出している。

「準備オツケー！さ、恵一さん行きましょ。」

「ああ、緊張するな…。」

「着く前に緊張してどうすんの！」

真理はそういうと、恵一の肩を軽くはたいた。

玄関で靴を履き、二人は振り返る。

「じゃあ、いってきまーす。」

「いいこにしてるのよー！」

「はいー！いつてらっしゃーい！」

玄関の扉が開き、そして閉まった。

これが、理恵と両親の最後の会話だった。

二人は車で実家に向かう途中、大型トラックと正面衝突した。事故の原因は、トラックの運転手が長時間運転していたため、居眠りをしてしまったと思われる。そして、反対車線に寄ってきたトラックを、二人は避けられなかった。

恵一も真理も、トラックの運転手も、即死だった。

そして、この事故で“四人”の命が失われたのだ。

理恵は、迎えにきた祖父と共に病院へ向かった。

祖父は、理恵に両親を見せるか迷ったが、帰ってこない両親を待ち続けるというのもしたたまれないので、両親を見せる事にした。

理恵と祖父は霊安室に入ると、冷たい空気を感じる。

「おじいちゃん……暗くて怖いよ……。」

理恵は祖父の手を強く握り締める。

祖父は恵一と真理の前まで行くと、一度大きく息をはいて、二人にかぶさっていたシーツを開ける。

「……くっ……！」

二人の青ざめた顔に、祖父は涙がこみあげてくる。

しかし、祖父はそれをこらえ、理恵と同じ目線になるようにしゃがんだ。

「理恵？よく聞くんだよ？」

理恵は、祖父がいつものやわらかい雰囲気ではないことに気付き、真剣な表情になり、うなづく。

「理恵のパパとママはね、死んでしまったんだ。みてごらん。」

理恵は促され、二つのベットを見上げる。

そこには、見慣れた二人が、見慣れない表情で目を閉じていた。

「…なんでパパとママは寝てるの……？」

自分のした質問の答えを、理恵はわかっていた。

この部屋の暗さに。

祖父の雰囲気。

両親の表情に。

それで、理恵は子供ながらに理解したのだ。

しかし、質問せずにはいられなかった。

もうすぐ目を覚ますよ、と言ってほしかった。

しかし、祖父は首を横に振った。

「寝てるんじゃない。…死んでしまったんだ…。」



子供に話すのは酷すぎるかもしれない。

しかし、祖父はそんな気持ちを追いやり、言葉を続けた。

「もう、目を覚まさないんだよ。」

理恵は二人を見つめたまま、ゆっくりと二人の元に近づいていく。

「パパ、ママ。なんでこんな所で寝てるの？早く帰ろうよ。」

理恵はいつもの調子でしゃべり続ける。

「帰ったらね…理恵、ママのシチュー食べたいな。パパも好きですよ？」

二人は答えない。

「そしたらね、お話聞かせてよ。まだ途中でしょ？王子さまがお姫さまを助けにいくところ。」

表情さえ変えないまま。

「お話聞いたらね、みんなでいっしょに寝ようよ。あ、でもパパは寝相悪いからな。」

祖父が、理恵の両肩に手を置く。理恵が振り返ると、祖父は首を横に振っていた。

理恵はうつむき、今日の朝の会話を思い出す。

お留守番できるか？

夕方には帰るから

いいこにしてるのよ！

いつてきまーす

「…かえって…くるって…」

理恵の目には涙があふれてくる。

「かえってくるって………言ったのに………」

理恵は咳を切ったように泣きだした。

二人は、それでも答えることはなかった。

## 6 笑う事

「...心の中で...笑ってる.....。」

オレはベットに仰向けに寝そべりながら、呟いた。

水野が公園で言ったこと。オレはそれを思い出していた。

。

太陽は完全に沈み、東の空からは星が出ていた。  
それにつれ、公園は少し肌寒くなってくる。

.....こんな話、ドラマにしかないと思っていた。  
でも、ドラマは人に見せるためだけにあるのであって、現実になんか  
が起き、それを今まで心の中にしまっているのは、とてもつらい。  
つらいなんてものじゃないだろう。

実際、オレはたえられなかった。気が狂うまでたえ、たえることを  
諦めると、世界がモノクロになった。笑うことができなくなっ  
てしまったのだ。

全員、赤の他人に見えて、それがいやで人との関わりを絶った。

だけど水野はどうだ？

オレは隣を見る。

水野は過去を振り返り、悲しい顔さえしているけど、目は、あの青

年のものとは、まったく違かった。

水野が空を見上げる。

空は雲一つ無かった。

「私ね、両親が死んでしまったのは悲しいけれど、いなくなっただけじゃない、って思うの。」

水野はオレの胸に人差し指を立て、無邪気に笑った。

「ちゃんと、ここで笑ってるんだよね。」

オレは自分の胸を見つめる。

オレの心の中で、母さんは笑っているのだろうか…。

「胸の中にいる人は、自分が笑えば、笑ってくれる。悲しめば、やっぱり悲しんじゃうんだよ。」

水野は再び、空に目をやる。

「だから私は、いつも笑ってたい。たまに悲しくなるときは、自分の胸を見るんだ。そしたらね、いつも笑ってれば、そんな時でも笑ってくれてるんだ。」

水野は立ち上がり、オレに向き直る。

「だから、冬貴も笑ったほうがいいよ！いっぱい笑って、いっぱい泣いて！そしたら、」

水野は笑う。

頼には、小さなえくぼができていた。

「そしたら、みんなも笑ってくれるよ。」

。

オレはベットから起き上がり、ベット脇に置いてあるマイルドセブンと書かれた青い箱から、しわのついた煙草を一本取り出す。それをくわえ、先をライターであぶると、赤い火がつき、細い煙が出る。

フィルターに口をつけ、それを深く吸うと、心なしか、気分が落ちついてゆく。薄い煙をゆっくり吐き出すと、それは昔の心と一緒に上へと舞い上がっていった。

「わらう、か…。」

モノクロの世界に、色が一つ足されたような気がした。

## 7 料理

この現場に来て、10日が経とうとしていた。

…あー…春のくせに……

日課の太陽をにらむ事を、今日も済ます。

今は昼頃。太陽は空の真上に堂々と居座り、おりようとしな

い。オレは屋根の上で、仕事を放りたい気持ちを我慢して、必死にトタンのサビを落としていた。

「おーい！」

今ではもう、聞き慣れてしまった声がある。

隣の家を見下ろすと、水野が手を振っていた。

「ご飯できたよー！」

そうか……今日は土曜日なのか……。

オレは覚悟してうなずき、熱したフライパンのような屋根から脱出した。

オレはこの現場で、土曜日恒例の行事がある。

昼メシを水野の家で食べることだ。

水野は、オレがここ数年手料理を食べていない事を知ると、いきなり怒りだし、せめて土曜日くらい、メシは自分が作ると言いだした。

その時の水野の勢いに押され、それを了承してしまった。

水野はそれをとて喜んでいたし、オレもたまには誰かの手料理が食べたかったので、まあいいかな。と思う。

……しかし、それは大きな間違いだった。

水野は料理が下手だったのだ。先週の昼メシはひどかった。

肉じゃがはジャガイモがシャリシャリ…というかボリボリと小気味のいい音がしたし、味噌汁にいたっては何故か甘かった。

水野にそれを聞くと、

「あつ！ごめん！さとうとマスタード間違えちゃった！」  
と言っていた。

…よかった…間違えてくれて…。

今日はどんな料理が出るのか……。

オレは不安な表情を隠しながら、理恵の家へと入っていった。

風情のある木造の日本家屋。平たく言うとボロイ家だ。

横開きのドアを開け、おじやまします、と一応挨拶するが、誰も応えない。

少しため息をつきながら玄関に腰掛ける。

めんどろな直足袋じかたびのフックを外していると、トテトテと可愛い音を立てながら、所々青い柴犬、ポチが尻尾をふりながらオレの方に向かってきた。

オレは直足袋をぬぎ、ポチの頭を軽くなでてやると、ポチは、つい

てこいといわんばかりに、オレを時々ふりかえりながら、居間へと誘った。

「おじゃまします。」

「おおー、冬貴くん。今日も精がでるのう。」

シワだらけの老人が、さらに顔をシワだらけにして、笑顔でオレにこたえた。

この人の名前は……わからない。水野はおじいちゃんと呼んでいるし、この人も自分から名乗らない。だからオレはじーさんと呼んでいる。

「じーさん。今日のメシもすごい?」

オレが敬語じゃないのは、じーさんがそうしてくれと言ったからだ。

じーさんは苦い顔をして答える。

「ああ、今日もヤバヤバじゃ。」

今の言動からもわかるように、じーさんはかなり変人だ。ヤバヤバなんて老人から聞いたのは初めてだし、語尾に“じゃ”をつけるのも、逆にめずらしい。

しかし、それも何日かで慣れてしまった。

じーさんは口調だけでなく、内面もかなりおもしろい。話していても、老人と話しているような感覚はなく、趣味の合う兄



弟と話しているみたいだ。

趣味はコーヒープレイクを楽しみながらのネットサーフィンとか言っていたな。

オレとじーさんが、居間のテーブルを中心に、会話を弾ませていると、キッチンから、水野が満面の笑みでやってきた。

水野のおかげで、見る世界が変わった。じーさんと楽しく会話できているのも、水野のおかげだ。

オレを取り巻く環境は変わっていないのに、以前より、水野に会う前より楽しくなった気がする。

あの日以来、初めてできた友達。その存在さえ認めていなかったオレも、それを認めざるをえないだろう。

オレはいままでの奴らと同じように、水野にも冷たい態度をとっていた。

そうすれば、水野もいままでの奴らと同じように、オレから離れていくと思った。

しかし、水野はオレを真正面からみてくれた。

たった半月近くの付き合いの奴にだ。

オレの中の何かが変わろうとしている、のかもしれない。

「さ、じゃんじゃん食べてね！」

そして、オレを変えようとしてくれている友達が、オレを殺そうとしている。

テーブルに広がる夢のようなメニュー。ああ、これが夢だったらどんなに助かるか。

「冬貴、どうしたの？まさか食べないワケないよね？」

劇物を食べることを勧める理恵。

「あ……ああ……。」

相づちを打つことしか出来ないオレ。

……オレは午後からの仕事を早退した。

## 8 悪夢

夢を見る。

ああ、またか。と、いつもの感想を述べる。

オレは車の助手席に座っていた。運転席には母さん。

それは、母さんが死んだ日の夢だった。

あの日のオレが何かを喋っている。オレはそれを客観的に事を見つめる。

オレは、あの日のオレの中にいるのに、あの日のオレは言うことを聞かない。

オレの意志とは関係なく、あの日のオレが行動する。過去は変えられないと言わんばかりに。

…そう、見ているしかないんだ。夢が覚めるまで。

なにも変えられないんだ。オレが叫んでも、あの日のオレも、母さんも誰も気付かない。

オレと母さんが楽しそうに会話を弾ませている。

あの日と全く同じ会話。

その時だ。

いきなり子供が横断歩道から飛び出してきた。

ここは国道で、信号が青だったことも加え、車は50キロ近く出て

いた。

母さんは咄嗟の事に、子供を巻き込むまいと、ハンドルを思いっきり切った。

運がいいのか悪いのか、ちょうど電信柱に正面衝突し、子供は無事だった。が、車のフロント部分は大破していた。ガラスは飛び散り、煙が上がり、かなり危険な状態だった。

誰かが呼んだ救急車の音で、オレの意識は覚醒した。

朦朧とした中で、自分の状態を把握する。

すっかりシートベルトを絞めていたので、車外には放り出されなかったが、頭からは、かなり出血していて、全身もガラスで切り刻まれていた。

母さんは……。

オレは隣を見て愕然とした。

下半身が…潰れていたのだ。

どうやら、右側から正面衝突したらしい。オレ側のフロント部分はまだ形があるが、母さんの方は見る影もない。まさに、大破だ。

オレは母さんにすがった。母さんは大量の汗をかきながら、大丈夫、大丈夫だから。と、うわごとのようにオレに呟いていた。

「大丈夫ですか!？」

救急隊員の声に振り返る。

それはとても皮肉に聞こえた。

大丈夫？これを見て大丈夫だと？

救急隊員は車内の状態を把握すると、オレに手を差し伸べてきた。ドアは事故の時にすでにドアとしての機能を失っていたようだ。

「とりあえず、君は出なさい！」

救急隊員にシートベルトを外され、引き出されそうになるのを、必死で抵抗する。が、体が思う様に動かなかった。ケガをしていたということもある。しかし、一番の理由は、恐かったのだ。いまの状況が。

フロントからは黒煙が溢れるように出て、救急隊員は、危険だ、とか、もう時間の問題、などと喚きたてている。

オレの、母さんから離れたくないと思う部分が、唯一母さんの腕をつかみ、離れなかった。

母さんはオレの手の上に手を重ねた。

「…冬貴は…先に出なさい……………母さんは…大丈夫だから……………」

母さんがそう言って微笑んだ瞬間、オレは全身の力が抜け、つかんだ腕を離してしまった。

車外に出るが、いまだに車内に戻ろうとするオレに、救急隊員がオレの腕を後ろから組みつけ、離さない。

母さんの優しさに甘えたかった。大丈夫って言っているんだから大

丈夫なんだ。

オレの恐れている部分が、必死に言い訳をする。

……そんな訳がない。

大丈夫な訳ないだろ。

オレは車内を凝視する。

母さんは、いまだにオレを見つめ、微笑んでいた。

「母さ  
」

一瞬、オレの視界が真っ白になった。続いて、耳をつんざく爆発音が轟く。

何が起こったのか、理解できなかった。したくなかった。

車は、母さんを車内に残したまま、炎上していた。

救急隊員の喧騒がより一層激しくなる。

オレは地面にへたりこんだ。

母さんが大丈夫って言ったから。

そうじゃない。

恐かったんだ。この状況が。

逃げたかったんだ。母さんを残してでも。

……だから、大丈夫だって“思った”んだ。

あの時、一緒に死ねたら……。

母さん……

「……………っ!」

視界には闇が広がる。

目が慣れてくると、ここは家のベッドだというのに気付く。

ベット脇のデジタル時計に目をやると、夜の11時と言う事がわかる。

目が染みると思ったら、オレは全身から大量の汗をかいていた。

それを拭いながら、ベットからゆっくり降りて、乾いた喉を潤そうとキッチンへと向かう。

キッチンに着き、水道の蛇口をひねる。

規則的に流れる水に窪ませた両手をかざし、そこに溜まった水を喉に通す。

それを繰り返して、一息つくと、周りの静けさに違和感を覚える。

リビングに目をやると、誰もいなかった。

もしかしたら……。

ありえない事だとは思う。でも、オレはそんな無理な希望を信じたかった。

オレは焦る鼓動を抑えつけ、母さんの部屋へと早歩きで向かう。

もしかしたら…もしかしたら…。

ドアノブに手を掛け、一気に押す。

「母さん！」

誰もいなかった。

オレの声だけが、この部屋に響く。

部屋は、母さんの柔らかな匂いと、何年も手付かずのカビ臭い匂いがした。

…そう、母さんはもういないんだ。ここには、オレ一人しかない。いや、ここだけじゃない。どこにもだ。

……オレは逃げ出したかった。この現実から。この現実を見せ付ける空間から。

どこかに居るかもしれない。オレの存在に気付いて、オレに笑いかけてくれる人が。

……いるはずだ。

オレは、そう自分に言い訳をしながら、軽い服を着て、玄関のドアを開けた。

外はいつの間にか、雨が降り付けていた。

オレは構わず外に出た。

傘さえ持たずに。



9 〽大事な……

……オレは何をやっているんだ？  
誰がいるっていうんだ？

オレは雨に打たれながらベンチに座っていた。

雨が紫煙さえもかき消していく。

目の前に、あの青年が現われた。そして喋る。

いるわけないだろ。

おまえに誰がいるっていうんだ？

今まで一人でいたくせに。

こんな時だけ他人を頼って。

おまえはいつまでも一人なんだよ。

オレとおなじ。

オレとおなじなんだよ。

青年はそう告げると、満足そうに消えていった。

……オレは、一人……。

「冬貴…？」

母さんの声がした。

一気に鼓動が高まる。

その声の方を向く。

そこには大きめの傘をさして、ビニール袋を下げた少女が立っていた。

「……みずの……。」

かすれた声でそれだけ言った。

自分が滑稽だ。

こんなに時がたってもまだ、希望を捨てきれない。

オレは自嘲気味に立ち上がりながら、水野に近づく。

「何やってんだ？こんな時間に。」

「え、あ…。コンビニに行ってたんだけど…。」

なぜか言葉の詰まっている水野に疑問を持つが、オレはそんなことを気にしてる余裕はなかった。

早く逃げ出したかった。母さんと被る水野の姿に。

「そうか。あんまり夜中に出歩かない方がいいよ。」

オレはそう言って笑い掛け、そのまま通り過ぎて公園を出ようとした。

「……冬貴。」

その声に思わず立ち止まってしまふ。

「今、すごい悲しい顔してるよ?。」

オレは笑いながら振り返る。

「なんで? オレ、笑ってるじゃんか。」

「無理して笑ってる。」

水野がオレの言葉をさえぎり、そして続ける。

「そんな笑い方しちゃダメだよ。」

その言葉に、オレの顔から笑みが消える。

水野はオレに歩み寄ると、オレに傘を差し出した。  
オレの上からは、雨が降ってこなくなった。

「笑えないときはさ、私が笑ってあげるよ。冬貴の変わりに。ねっ?。」

そう言つて、雨に打たれながら、水野は笑った。

……オレはその時、今まで堪えていたものに堪えきれなかった。  
それが涙として溢れてくる。

「だって、失うんだ…。オレの大事なモノは、いつだって…無くなるんだ…っ」

「それって私が大事なモノって事？うれしいなあ。」

そうだ、そう言っているようなものだ。

しかし、オレは構わずに頷く。

すると、水野はそっとオレと手を重ねた。

「無くならないよ。絶対に。根拠は無いけど、誰かに大事に思われてたら無くなれないよ。」

「…り…え…」

理恵の手が暖かくて。理恵の存在が暖かくて。

それをもっと感じたくて、オレは、気付いたら理恵を抱き締めていた。

理恵はオレの背中に手を回し、強く抱き締めてくれた。

俺が泣き止むまで。

雨が降り止むまで。

オレと理恵は、ずぶ濡れになりながら、抱き締め合った。

。

オレはリビングのソファに腰掛けながら、まだ濡れている髪を無視して、コーヒーをすすする。

その隣で、理恵もコーヒーをすすっていた。

オレはあの後、さすがに理恵をずぶ濡れのままで帰せないので、オレのマンションで服を乾かす事にした。

理恵の服は脱水機に回されていた。理恵はオレの服を着ながら、コーヒーを苦そうな顔をしながらもすすっている。

「……………ありがとうな。」

「ん？」

「さつきは、ありがとう。」

思い出すと今でも顔が熱くなる。

アレじゃまるで、泣きじゃくる子供と、それをあやす母親だ。

「理由は……………聞かないでおきましょう！」

理恵は一瞬オレを見つめ、笑った。

「……………いいのか？」

「だって冬貴が泣くんだもん。かなりの理由でしょ？話したくなっ

たら、話せばいいよ。」

理恵の優しさが嬉しかった。オレは少し笑いながら、コーヒーをまた一口すすろうとする。

「それより！」

いきなり顔を近付けられたものだから、オレはコーヒーが気管に入り、思いつきり咳き込んだ。

「…な…何…？」

オレが理恵の方を向くと、理恵はまた元の位置に座った。

「…さっき言った事って、本当？」

「さっき言った事って？」

「だから…その…大事な…とか…なんとか…。」

俯き、何故か顔を赤らめている理恵に疑問を持ちながら、オレはまたさっきの事を思い出した。

「ああ、本当だよ。」

「本当に!？」

今度は顔を上げ、嬉々としている理恵に圧倒されながら、オレは答える。

「あ、ああ。理恵はオレの大事な友達だ。」

オレが言い終わった途端、理恵は無表情になった。

「え…え？…なに…？」

状況が把握できないオレを無視して、理恵は立ち上がり、ビニール袋を持った。

「じゃ、ごちそうさま。大事な友達の手紙だ。」

理恵はそのまま玄関に向かった。

「えっ？なんで…怒ってんの…？」

玄関で靴を履いていた理恵は、オレの声にピクリと反応すると、オレを睨み付けた。

「怒ってませんっ！！」

それを捨て台詞にして、理恵はドアを開け、乱暴に閉めた。

「…怒ってるじゃん……。しかもそれ、オレの服……。」「

オレは玄関を見つめながら呟いた。

そして、またこのマンションで一人になったことに気付く。

しかし、さっきまでの言い様のない違和感は無くなっていた。

「ともだち……。」

オレはその言葉に、つい顔がほころぶ。なんだか、初めて友達できた気分だ。

オレは明日になるのがなぜか楽しみになって、ベットに潜り込み、ほころんだ顔のまま眠りについた。



10〰日曜日〰

オレは朝日の眩しさと、ベット脇にある時計の、耳障りなアラーム音で目が覚めた。

ベットの上でとりあえず上体を起こし、大きくあくびをしながら伸びをして、ベットから降りる。

眠気を覚ますため、シャワーを浴びにシャワー室に入る。

頭からそれを浴びている途中、仕事というフリーズが浮かび、また少し顔がほころんでしまう。それと同時に、何故か違和感を感じる。

疑問に思いながら、シャワー室から出て、洗いたての白いシャツを着る。その後作業ズボンを履いて、ベストを着てボタンを閉める。財布と携帯電話をポケットに入れて、タビと予備のシャツをバックに詰め込む。これで、もう朝の準備は万端だ。

玄関を出て階段を下り、ガラス張りの扉を開けると、ゴミ捨て場のあたりで、管理人がこまめに掃除をしていた。

「おはようございます。」

オレの声を聞いた管理人（中年の女性。…平たく言うとおばさん）が、驚きの表情をしながら口に手の平を当てるというオーバーリアクションをした。

しかし、そんな行動をする気持ちも、わからなくもない。オレは、自分から挨拶する事はかなり珍しい。

大体は、向こうから挨拶され、それを無言の会釈で返す。

いつもそんな挨拶しかないオレが、いきなり自分から挨拶したのだ。された本人は、相当驚くだろう。

「アラアラアラ。珍しいわね。紺野さんから挨拶するなんて。」

そう言いながら、手に持っていた簾を逆さまにして、さっきのポーズのまま、管理人はオレに近づいてくる。

視線はオレを定めたまま、上半身をまったく動かさずに近づいてくるものだから、オレは心なしか少し後退りしてしまう。

「は…ハア…。まあ……」

オレは目前まで迫った管理人に、なんとかそれだけ言った。

今日はなんだか気分が良かった。まあ、その理由はハッキリとしているが。

管理人は、遠慮も無しにオレの事を上から下まで見ると、含みのある笑いを見せた。

「ははあゝん。さては、昨日の可愛い女の子とチヨメチヨメしちゃった？彼女なんだか怒ってたわよ？まさか無理矢理？」

なっ…なんで理恵が来た事を知っているんだ！？

「チヨツツ…！してませんよ！」

オレは、かなりの大声で否定する。オレが大声を出すことも珍しいので、管理人は、それ以上理恵については聞かなかった。

管理人はつまらなそうに作業に戻る。

掃除を続けながら、管理人が独り言のように喋る。

「まっ、いいけどね。管理人様はなんでもお見通しなんだから。それよりもご苦労さまね。日曜なのに仕事なんて。」

オレは管理人を見つめたまま固まってしまふ。

「……………え？」

「だから、日曜なのにお仕事ご苦労さまって言ったの。」

管理人は、さも当たり前のように言った。

辺りは、小鳥のさえずる鳴き声と、管理人の、箒を地面に擦る音しかなくなる。

「ええエエツ！？」

いきなり出したオレの大声に、管理人は肩をすくめ、箒を地面と水平に構えながら、辺りを素早く見回した。

「なに！？地震！？雷！？火事！？カーネルおじさん！？」

「あ…いや…。か…カーネルおじさんです…。」

「出たのね！奴が！奴は、人々を自分と同じ体型にしようと必死なの！見てみなさい！？あの手を！あの手は何を求めているの！？」

「あ…。自分、帰ります…。それじゃあ…。」

オレは踵を返して、放心したまま、マンションに戻っていった。

「あの手はアレね！多分、美人の女でも想像しているのよ！どうりであの顔！死んでも悔いは無いって顔してるもの！ああ、ケダモノ！男はいくつになってもオオカミなのよ！気を付けなさい！きりきり舞いよ！きりきり舞いよ！あら？これは違う曲ね……………」

「

…今日は日曜？どうりで違和感があつたわけだ…………。

オレは自分の家に戻って、とりあえず作業服を脱ぎ、デニムパンツを履いた。

…………張り切りすぎた。日曜なのに仕事があると勘違いするなんて。

ひとまずリビングのソファに腰掛ける。壁掛時計をみると、短針は7を指していた。日曜日に起きる時間じゃない。

今日一日の出鼻を挫かれたような気分になり、することが無く途方に暮れていると、携帯の着信音が鳴りだした。

オレは自分の部屋の、ベットに放っていた作業服のズボンから携帯を取り出す。

バイブレーションの振動が伝わる中、二つ折りの携帯を開くと、画面を見る。

その画面に表示された名前に、少し胸が高まる。

通話ボタンを押して、耳にあてがう。

『おっはよー！』

電話先の、相変わらずの喧騒に、少しおかしくなってしまう。

「おはよう。……どうした？」

挨拶を返した後に、今は日曜の早朝と言う事に気付き、疑問に思ふ。

『頼みたいことがあるんだけど……いいよね？』

理恵が断れない雰囲気を出しているが、まず、内容を聞かなければ了承できない。

「まあ、用事はないし、構わないけど……どんな事？」

『そつかそつか！頼まれてくれるか！』

「いや、まずどんな事が言ってくれなきゃ。」

『うんうん！ありがとう！じゃあ、10時に私の家ね！』

……会話が噛み合わないな。電波が悪いのか？いや、多分、理恵の頭の電波が悪いんだろうな。

「理恵、電波大丈夫？」

「ん……？私の携帯は全然大丈夫だよ。」

いや、頭の。

……なんて言えるわけがない。

『じゃあ！そういうことで！』

理恵がそう言うと、プチッ、と、通話の切れる音がした。

…いや、何がそういうことなのか分からないんだけど…。

そんな事を思いながらも、日曜の真っ白だった予定が少し黒に染まったことに、そこまで悪い気はしなかった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5885a/>

---

青いペンキ

2010年10月9日02時07分発行